エゾマツ

NO　78号　　秋季号

2006年10月24日

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目　次

神宮の森　　会長　田村　允郁

1　東大演習林での研修から
・多彩で充実し楽しかった研修　　広報部
・東大演習林の研修から　　札幌市　佐々木幸夫
・ボラレン富良野研修会に参加して　　富良野市　宮田　和恵

2　自然との出会いから
・少年とミヤマカマズミ　　札幌市　簾内　道夫
・オオハンゴウソウとネバリギク　　平取町　川村　桂介
・湿地が消えてゆく　　平取町　川村　桂介
・観察会　　札幌市　原田　和彦
・自然ガイドを考える　　苫小牧市　谷口勇五郎

3　小樽支部の自然観察会から
・定山渓天狗、富良野、オゴバチー穴滝、塩谷丸山等自然観察会
小樽市　大川　良祐
・小樽市塩谷丸山の植物相　　小樽市　北原　武

4　北見支部からの報告
・コククジラの回遊に参加して　　滝上町　富山光太郎

5　登山とペットについて　雑誌「岳人」　　富良野市　南部　栄一

6　連載
・忘れ得ぬ花　　当麻町　野呂　一夫
・秋・カムイの森ー野幌　　札幌市　小泉　三雄
7　書評
・自然への親しみをこめた案内書　　広報部
8　第２回役員会
9　事務局から連絡
１０　実践セミナー　の案内

〔主　張〕

神宮の森

会長　田村允郁

毎年、７月と９月に、東京の明治神宮に隣接するオリンピック記念青少年総合センターに行く用があり、その都度、明治神宮の中を通っていきます。ご存じのように、神宮には明治天皇と昭憲皇太后が祭られていますが、うっそうと茂る木々を縫って参道が続きます。　北海道で見慣れている木は少なく、その多くが常緑広葉樹（照葉樹）で、ほとんど樹木名がわかりません。気になる木があると、樹形や葉の特徴をメモし、家に戻って図鑑等で調べては見るのですがどうも確信がもてません。

明治神宮の森の木々のことや、常緑広葉樹（照葉樹）の多さについて、参考書やＨＰで検索し調べて見ると私の知らなかったことの幾つかがわかってきました。

明治神宮は植生遷移の理論を応用して森林の復元を図った森と言われています。植生遷移とは「ある地域の植生の組成や構造が時間とともに移り変わっていく現象」と定義されています。

現在の明治神宮のある場所は、かって農地や草地のなかに松林や沼地の点在する土地でありました。１９１５年に当時最先端の林学や造林学、そして技術者を集めた明治神宮造営局が組織され６年間かけて全国から寄せられた献木を中心に３６５種約１２万本の植林を行い森が造営されました。

森の構造は上層、中層、下層に分けて、上層にはアカマツ、クロマツの陽樹の親木を、中層にはヒノキ、スギ、モミなどの針葉樹とケヤキ、ムクノキ、イチョウなどの落葉広葉樹の若木を、そして、下層には将来の極相林の構成種となるシイ、カシ、クスノキの幼樹を配置しました。中層の針葉樹や落葉樹は常緑樹に形や色の変化を加える配慮からだといわれています。

このような状態を出発点（第１段階）として、自然の遷移にまかせてヒノキ、サワラなどの針葉樹の優占する段階（第２段階）を経て、最終的にはシイ、カシ、クスノキの常緑樹の極相（第３段階）に達することが目論まれました。造営後約９０年を経た現在、まさに予測通りの常緑広葉樹（照葉樹）が生い茂る神社の森を形作っています。

東京以西を旅すると、照葉樹が多いことに気付きますが、緯度や気象条件等の水平分布の違いなどと勝手に解釈していました。しかし、神宮の森の照葉樹の多さについては、その成り立ちを調べてみると、なるほどと納得がいきました。

何にでも言えることですが、分からない事、疑問に感じた事、知りたいと思った

事等を自分なりに調べたりして得た知識は、以外に忘れずに記憶できるような気がします。年齢を重ねると、脳細胞が死滅していき、脳の老化をそのまま受け入れていると、脳の機能の低下が加速するといわれています。肉体的な老化は止む得ないにしても、努力によって、ある程度それを阻止できるともいわれています。的はずれかも知れませんが、脳を活性化させる努力とは、自分の関心事におもいっきり、のめりこむ事だと思います。関心事の中で、興味や関心、分からない事や疑問があれば、苦にならずに調べたり、人に聞いたりします。人に聞くということは、そこにコミュニケーションが生まれますから、脳に悪いはずがありません。とはいうものの、面倒臭がりやの私は分かっていても、脳の活性化にあまり努力しないのは老化進行のせいなのでしょうか。

それにしても神宮の森は成り立ちを知らなければ、人間の知恵と人手をもって作られた森とはちょっと考えにくいほどみごとな森を形作っていますが、このことに関連して、例年、富良野の東大演習林で行われる研修会で学んだことが思い出されます。東大演習林も、私たちを受け入れて頂いている担当の先生の講義を通じて、あの見事な森も人の知恵と地道な努力によるものだということを知りました。森作りの理論と遠大な計画の実施により形作られた東大演習林も、あるべき神宮の森の姿をイメージし現在の状態を形作ったことと、どこかで共通する部分があるような気がします。

来年も機会があれば、明治神宮の境内にある夫婦の楠の大木を眺め、神宮の森の道を散策したいと思っています。

6月30日～7月1日 東大演習林で

多彩で充実し楽しかった研修

広報部

６月３０日（金）から７月１日（土）、２日間にわたり参加者は２１名で、楽しく充実した研修会が行われた。植樹にはじまり大麓山での自然観察、作業現場の見学、登山、枝打ちなど自然にトータルに向かい会った研修会でした。参加した人たちは大きな満足感を得たものと思われる。今回で３回目をむかえ、できれば来年も実施してみたいと思う。その際には多くの会員に参加してほしい。

指導してくれた宮本義憲先生には、今回の企画、マイクロバスの運転、案内などとてもお世話になりました。ありがとうございました。

１、今回の研修内容

《　６月３０日　》

１３：００　セミナハウスに集合、打ち合わせ

１４：００　演習林で植樹、５年もののトドマツ約３０本

１５：３０頃　大麓山で日高固有種といわれているが、ここにも自生している「エゾノジャニンジン」などの観察

１６：２０頃　木材作業現場見学

１８：００　楽しい懇親会　ジンギスカンなどで

《　７月１日　》

７：００　朝食、打ち合わせなど

８：３０　大麓山に向かい、登山開始

１０：３０　頂上、富良野岳をはじめ十勝連峰を望む、足元には多彩な高山植物

１４：３０　天然林施業地見学

１４：４０　枝打ち作業

１５：３０　解散　　＊なお時間については多少の幅もあり。

２、研修の主な内容にふれて

・植樹、きれいに整地されたところに、よく育った５年もののトドマツの苗木を約３０本を植える。場所は「老節布施業区」の北側の一部で

あったように思う。

- その後大麓山の麓に、　エゾノレイジンソウ，ヤマブキショウマなどいくつかの草花を見ながら、小さな清冽な沢でエゾノジャニンジンを観察する。まばらな穂の上に清楚な小さい白い花を咲かせていた。生命の輝きがあった。アイヌワサビの変種のようである。エゾノジャニンジンはこれまで日高地方の固有種といわれてきた。（新版「北海道の花」北大図書発行）　しかしこの山の麓にもひそかに自生していることを教えていただいた。
- 更に木材の切り出し現場へ、長さ６－８m位の大きな原木、材質のあまり良くないのはパルプ材として、良質なのは建築材として市場へ。
- ７月１日　大麓山登山、　大雪山火山帯の南に位置し標高 1460m。宮本先生の運転するマイクロバスに乗せていただいて約 1100n の地点まで行き、そこから細い道を通って山頂に向かう。途中、夕張山系、芦別山系を遠望しながら、足元には多くのハクサンチドリ、その変種であるウズラバハクサンチドリなどを見ながら頂上に向かう。頂上では、目の前に山容の美しい富良野岳が屹立し、それに連なる十勝の山々、更には日高の連峰をも眺望することができた。

天気にも恵まれ北の山々の大パノラマを満喫できた。また多くの高山植物に出会いイソツツジより葉が細い大雪山の固有種であるヒメイソツツジを観賞することができた。ハイマツ帯のなかに咲いていたミネザクラの美しさも格別であった。

参加されたみなさん　頂上で

- 天然林施業現場視察、かっての林業では良木を伐採して市場に出してきたが、今日では成長の悪い木を切り、良木を残して大きく育てる方向に変わっている様子を見る。
- 枝打ち作業、ノコやナタを用いて、約 20 分位の作業、みんな順調なよう

でいい汗を流した。

3、楽しかったいくつかのエピソード

- 大麓山の登山に向かい、ゲートの鍵を開ける際、バスの中から突如「ここには赤ヒョウビンはいないのですか（?）」という質問がとびだす。宮本先生は、声は聞いたが、… … … ゲートを開けている赤いジャンバの宮田女史を見て、そこに赤ヒョウビンがいるといい、みんなを笑わせた。富良野の若いマドンナは苦笑していた。
- 懇親会はジンギスカンであったが、獣医師の南部さんの特製のホルモンをいただき、この地特産のメロン、白いアスパラガスなどとても美味しかった。
- 帰りに、東大演習林という文字の上に大きな鹿の図柄の入ったすてきな「手ぬぐい」をいただいた。来年はこの「手ぬぐい」を頭におおい、その上に東大演習林と書かれたヘルメットをかぶり、もう少し枝打ちなどの作業に汗を流してみたい。

：この行事を企画し実施してくれた富良野在住の南部さん、宮田さんにお世話になりました。とても楽しく充実した研修会でした。

＊＊　20周年記念　エゾマツ　特別号について

１２月１０日発行

＜私たちの活動の２０年を振返り、新たな発展をめざして＞

・歴代役員、各地で活動されている方々の意見
・２０周年記念行事報告、写真展、二つの講演の報告
・会員のみなさんの活動、自然への想いなど

＊＊　紙面の統一に協力を　寄稿される方々にお願い

・B５版で１枚　活字の大きさ明朝　１０，５ポイント
・ヨコ　３５文字　タテ　３５行　余白は上下左右２５mm
・題字はやや大きく、原稿の字数は１０００字位になる
・原稿の締め切りは１１月１８日まで　厳守で

東大演習林の研修から

札幌市厚別区　佐々木幸夫

３０数年前２年程根室市に住んでいた頃、車で狩勝峠を通過する際に、眼下に広がる東大演習林を見て、樹海の表現がぴったりだと、実感したり、サクラの開花季節に事務所付近の実に見事な咲きぶりが印象に残っている。

その後、自然に関わるボランティア活動を始めてから、東大演習林に関連した有澤浩さんのクマゲラ、高橋郁雄さんのキノコ、そしてドロ亀さんこと高橋延清さんの林分施業法などの本や図鑑を見て、一入（ひとしお）東大演習林に対する関心の度を深め、機会があったらぜひ林内を見たいものと思っていた。

さて、前置きが少々長くなった感があるものの、そのような思いがこの研修参加にあつた。

昨年１回目の７月１ー２日、予定の演習林内の最高標識１４６０m大麓山登山は融雪遅れで中止。私は登山よりも、林内をよく見たいという気持ちでいたので、より自然の営みを知ること出来た。たとえば自然交雑によるシロエゾマツ、図鑑でしか見たことのなかったヒメマイズルソウ、ホソバツルリンドウ、自然のなかのエゾマツの実生群や倒木更新、山腹を流れる清冽な水とその水を沸かして飲んだお茶（その場所は標高９３０mの経歳鶴頂上）。２回目の８月２６ー２７日は体調不良で不参加。

それが本年６月３０日ー７月１日に企画され、参加することが出来た。１日目は渓畔林探さくで、日高地方にしか見られなかったエゾノジャニンジンを、２日目は宮本先生の巧みな運転さばきで、車窓から林相を眺め、大麓山に。好転に恵まれ予定の標高１１００地点で下車、徒歩で大麓山に。頂上まで、各種の高山植物を見ることが出来たが、頂上にコマクサの幼体とおぼしきものが見られ、宮本先生に尋ねたら、本来この地にないももだが見たところコマクサだとのこと。今、各地で問題になっている事象だ。生態系に影響があると、国立公園内では環境省で除去に苦慮されている。それがこの大麓山まで、人為的な結果とすれば本当に困った人間の所業だ。

頂上の脇、１ｋｍ足らずのところに岩峰があり、登山道からそれるのでハイマツ、チシマザサの藪こぎになる。７０半ばの体で、体力的な衰いもあり、同行お皆さんにご迷惑をかける事態を心配しながら、未知の魅力に負けたが、ヒメイソツツジ、タカネザクラを見ることが出来て、苦労が霧散霧消となった。

それにしても、植樹、枝下しの実技を含めて、内容の充実した研修に拍手喝采を惜しまない。あらためて、協議会のスタッフ、地元の南部、宮田会員の心遣い、

それに中心になってくださった宮本義憲先生に心から感謝の念を禁じえません。
ありがとうございました。

（２００６，１０、１２記　）

タカネザクラ

～東京大学・北海道演習林～
ボラレン富良野研修会に参加して

富良野市　宮田　和恵

快晴の中の６月３０日（金）～７月１日（土）ボラレン研修会が今年も富良野市の東大演習林で開催されました。一日目は演習林内の散策、二日目は大麓山登山とトドマツの枝打ち体験と中味の濃い内容の研修会となりました。

大麓山登山は天気に恵まれ、頂上からの眺めは絶景でした。登山道にはオオバスノキ、クロマメノキ、コヨウラクツツジ、シラタマノキ、コケモモ、イワツツジ、ミヤマセンキュウ、ウズラバハクサンチドリなどなどが可憐に私たちを迎えてくれました。足元の花々に気を取られながらも頂上に着くと、少しの休憩後に秘密の体験が待っていました。

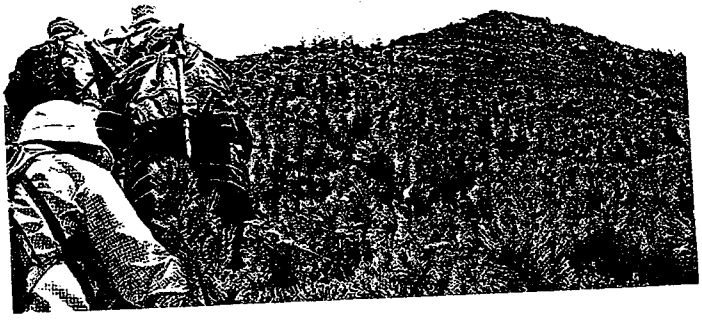
道無き道を歩くとは正にこのこと、ハイマツをくぐり、時には踏み押さえながら大麓山の尾根筋を少し下がった場所にある小岩までの体験（冒険）となりました。ハイマツにぶつかり続け足は打ち身と擦り傷だらけ、服やズボンはハイマツのヤニでベタベタ。行けども行けどもハイマツは道を譲ってはくれません。そうこうハイマツと格闘しながら行くと先陣の列が小岩の壁を登って行く姿が見えました。「もう少しだ、頑張るぞ！」と気合を入れながら小岩に立つ自分をワクワクさせていると、頂上に着いたＫさんが「やっほ～♪」と両手を振るのが見え、あまりに可愛らしい姿にカメラをパチリ。

やっと着いたその頂上はこれまた景色素晴らしく格別でした。高山植物もひっそりと可憐に咲き、私たちに安らぎを与えてくれました。ここは調査研究以外はいけない場所らしいのですが我ボラレンの為に特別に入れて頂けたようです。だからこその、この束の間の小岩での時間は小気味良く、満足な気持ちになれたのでしょうか。ハイマツとの格闘をしばし忘れた時間でもありました、が帰路はまたハイマツとの格闘が待っていました。。。。。

下山のあとは場所を移動し、トドマツの枝打ち体験です。ノコやナタで、枝を次々と切り落とす作業は登山疲れも何処へやら、とても楽しい作業でした。

この植林された森の木々たち（トドマツ）が元気に成長する手助けを私たちもしたのです。この木たちの成長をいつかまた、富良野に観に来てくださいね。

来年の大麓山の登山道は旧登山道を使うそうです。大麓山の尾根筋に歩く大麓山登山を是非、来年も研修部で開催をお願いします。



＊＊ 研修部からのお願い

来年度の研修の場として適切な場所がありましたら、ぜひ研修部長の小林さんまで連絡ください。

今年度は「芸術の森周辺観察会」を新しく設定して好評でした。

少年とミヤマガマズミ

札幌市豊平区　簾内道夫

少年は「宝石のような赤い実をつけたミヤマガマズミの枝を、お母さんにあげたい、きっと喜ぶと思う。僕のお母さんは生け花を教えているんだ」と言いました。

昭和６４年（平成元年）にボラレンの育成研修会を大雪山で受講以来早くも１８年が経ちました。平成７年から札幌市白旗山都市環境林ふれあいの森で、金沢先輩の指導を得ながら一緒に森の案内人として市民の自然観察案内に携わってます。四季折々に変化する自然は何度訪れても新しい出会いと感動があり、自然観察で自然から学び、みんなの喜ぶ声に喜び、子供たちから教えられたり忘れられない思い出もあります。

今から４年前の秋晴れの日、事前予約をうけて親子森の観察会を開きました。男子小学５年生４人と３年生１人、大人男性２人女性３人計１０人の参加です。金沢先輩が先導し秋の草花を観察しながら森を案内しました。わき水の箇所では伏流水と水道の水も森から生まれることから森林の役割を話しました。

森の散策路を１時間ほど進んだ頃、高さが２ｍもないミヤマガマズミの木が日傘のように広げた枝先いっぱい赤い実をつけて宝石のようでした。この情景に子供も大人も素晴らしいと感動。そのうち小学生の１人が実の付いた小枝が欲しくなり、取ってもよろしいでしょうか？と聞きましたので、「ここは多くの人が観察にきますので、枝を折って持ち去れば後から来た人は見れなくなるし、写真にも撮れなくなるよ、どうする･･･」と金沢先輩が話しました。そうすると「そうだそうだ君が枝を折って持ち去れば後から来た人が見れなくなるよ、止めたらどうだ･･･」との会話が小学生の友達からありました。本人もしばらく考えて「僕やっぱり止めるわ」と言い出したので、金沢先輩も少年に「僕、とても偉いと」褒めてあげました。少年もにっこりと笑い周りの大人も小学生の友達も喜びました。

金沢先輩が少年に「どうして実の付いた木の枝が欲しいの･･･？」と理由を聞い

たところ、少年は「僕のお母さんは生け花を教えているんだ、今日森にこれなかったので、この赤い実の付いた枝をお母さんにあげたかった。きっと喜ぶと思った」との話に、参加者のみんなが胸に熱くなるものを感じました。金沢先輩が「お母さんにあげたいとの僕の心も素晴らしい･･･」とその少年の母親思いを褒めました。褒められた少年はにっこり笑顔、友達の母親の一人が「僕、２度も褒められて良かったね･･･」と話かけました。成り行きを見守っていた周りのみんなが「よかったね･･･」とその少年を褒めて心の中で拍手をしました。この日のことは少年たちの心の中に深く残り生涯忘れることはないでしょう。列の最後をつとめた私も感動をいただき心温まる話として今も大切にしています。

森の中では草花が咲き小鳥がさえずり、私たちの心をうるおし子供たちに感受性を高め優しい心を育みます。だが、心ない人の盗掘で美しい花を咲かせる植物が消滅しています。白旗山（面積約1,100ｈａ）でも､例えばクリンソウが絶滅しかけています。１０年ぐらい前までは広い森の４カ所に、毎年６月初め株集団でピンク色の花を咲かせ私たちの心を癒してくれました。現在は残念なことに奥地の１カ所だけです。今後何年私たちが森で咲くクリンソウを鑑賞できるでしょうか心配です。今、社会の中でも安全や思いやりの心が失われようとしていないでしょうか。毎日のように暗いニュースが新聞・テレビで報道され悲痛に思います。

アメリカの科学者で「沈黙の春」を著したレイチェル・カーソン女史（1964年54歳で没）が、その著作「センス・オブ・ワンダー　不思議さに驚嘆する」に、子供たちが自然の中で「美しいものは美しいと感じる感覚、新しいものや未知のものに触れたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情など」を育む大切さを書いています。私はこの本を読み森の案内人として自分の励みにしています。

秋の森でミヤマガマズミの赤い実に感動し、生け花を教えている母親にあげたいと思う少年の心に、優しい家庭の中で素直に育つ子供の幸せを感じます。また、良い友達にも恵まれています。感受性豊かなこの少年たちが、来将の社会を築き自然を大切に守り育てることでしょう。

秋に赤いミヤマガマズミの結実を見ながら、森の観察会と少年たちのことを思い浮かべ、自然解説の中で心に残るお話しのできるよう努力したいです。

オオハンゴンソウ と ネバリノギク

日高管内　平取町　　川村　桂介

昭和４０年代ごろまでは、物資や荷物を輸送するのに、トラックよりも鉄道を利用するのがまだ主流であった。国際化の進展により外国から入ってくる物資も年を追うごとに増加し、それに伴って荷物等に付着して紛れ込んでくるよそ者の植物の種子も多くなり、鉄道沿線では当然の如く帰化植物が数多く見られるようになっていた。当時、なかでもセイタカアワダチソウやオオハンゴンソウが線路沿いにどんどん進出していってはびこり、「鉄道ぐさ」と呼ばれるほどであった。そのオオハンゴンソウが今では道路の両側にびっしりと我が物顔に咲き誇り、「国道ぐさ」と呼び代えた方がいいくらいの勢いで増えてきている。トラック輸送が主流になった所以である。

また、輸送方法が汽車からトラックへと取って代わるにつれて道路の拡張工事や整備工事等が進み、崖が削り取られたり路肩がいじられたりして今までの植生が壊され、それらのよそ者が増え広がるのに一層拍車をかけている。

この日高路では、そのオオハンゴンソウが国道に留まらず、河川敷や農道や山道までにも進出し、夏の初め頃から秋の終わり頃まであの黄色い花をあちこちに咲かせている。驚いたことに、アシやオオイタドリのうっそうと生い茂る藪の中までにも侵入し、その勢いのものすごさを伺わせている。

さて、オオハンゴンソウの花期が終わる頃になると、それに代わって紫色や赤紫色の野菊が咲き始めるが、これらはほとんどが帰化植物のネバリノギクである。今から３０年前あたりでは、管内では余り見られない植物であった。その頃はエゾノコンギクが道路の縁に咲き乱れ、その中に混ざって帰化植物のユウゼンギクがところどころに咲いていたものである。それがこの３０年ぐらいの間に、後から入り込んだネバリノギ

クがユウゼンギクをも凌いで管内の道路沿いをはじめ山里の原野までにもあの鮮やかな赤紫色の花をびっしりと生い茂らせているのである。この花も、また「国道ぐさ・道路ぐさ」と呼ぶに相応しい存在になってきている。

これらの帰化植物のあるものは、自分の根からある種の毒素を出して回りの植物を弱らせながら増えていると言われている。それにしてもこのネバリノギクの繁殖力たるやオオハンゴンソウにも劣らず凄まじいものである。今に外国からの侵入者に全ての土地が占領されてしまうのではないかと考えるとそら恐ろしくなる。

この日高にも牧草や家畜の飼料、土手の芝草等に混じり、いろいろな帰化植物が入り込んできているが、オオアワダチソウやノラニンジン、アラゲハンゴンソウ、シロバナノシナガワハギ、ムラサキウマゴヤシなどなど道路沿いや空き地、牧草地等ではほとんどが帰化植物である。最近、国道筋ではシャグマハギ、カミツレモドキ、コズズメノチャヒキ、トゲナシムグラ、ブハラムラサキなどが多く目に付くようになってきている。

日高路は、ネバリノギクが咲き始めるともう秋である。一昔前の人達は、オミナエシやエゾリンドウ、エゾノコンギク等の花が咲き出すのを見ては秋の訪れを感じていたことだろうが、今ではこれらの花も道路沿いではほとんど見ることができなくなってきている。日本に昔から成育していたこれらの在来種の植物は、今や野山の岩場や林の片隅に追いやられ、そこでひっそりと咲いているしかないのである。寂しいかぎりである。秋も深まり冬が目前に迫ってくると、キクイモが薮の中から茎を高く伸ばし、そのてっぺんに黄色い花を付け始める。これもまた帰化植物である。季節を知らせる使者も、国際化の波におし流され交替を余儀なくさせられている。

湿地が消えていく

近年の工業化社会等の進行により、湿地は単なる無用な土地と見なされ、工業用地とか住宅用地あるいはリゾート用地として埋め立てられたり、干拓されたり、と様々な開発が行われて来た。

この日高では、昭和４０年代頃から経済の高度成長時代のバブルに乗り、競走馬が大量に増産される傾向にあった。私が住んでいる平取町もその例外ではなく、周辺の町同様牧場が次々と造成され規模も段々大きくなっていった。

それまでは、各牧場の中には小さな林や小沢の流れている湿地があちこちにあり、ヤチブキ（エゾノリュウキンカ）やミズバショウも雪解けとともに見ることができた。ヤチハンノキやヤチダモの林の中には「やちぼうず」があり、サクラソウやヒメイズイの群落も広がっていた。

川向かいのケンタッキーファームの周辺の湿地には、それは可憐な珍しい植物がいっぱいあり、四季を通じて楽しむことができた。アケボノソウ、ハナイカリ、エンビセンノウ、サワギキョウ、エゾリンドウ、・・・それにモウセンゴケまでも見ることができたのである。

それが牧場の規模拡大に伴い林の木が伐採され、湿地が埋め立てられ味もそっけもない、ただっぴろい牧草地に代わり果ててしまったのである。

今ではこれらの日本古来の花ばなは、日高では数が少なくなり、モウセンゴケどころか、サクラソウすら滅多にみることができなくなってきている。絶滅危惧種に数えられるのもそう遠くはないのではないだろうか。

湿地は、このようにいろいろな植物が成育していくためには、なくてはならない大切な場所である。そればかりでなく、トンボノ幼虫やタガメ、ゲンゴロウなどの水棲昆虫の生息場所にもなっているのである。この田舎にいても、昔は家の周りでもいつでも見ることができたシオカラトンボが、めっきり減って全然見られなくなってきている。

これ以上開発の名のもとに自然を破壊していくのは、程々にしてもらいたいものである。

「観察会」　　札幌市手稲区　原田和彦

自然に触れ、フィトンチッドを浴びる、それだけで充分、という人もいる。確かにそれもいいが、何とも勿体ない話だ。きれいな花を見、可愛い実に触れる。そして草花や樹木の名前を知り、花や果実に秘められた、植物たちの戦略というか、不思議な話、面白い話を仕入れたら、楽しみは２倍にも３倍にもなる。

そういう自然に関する知識は、図鑑を調べる、本を読むという、独学・座学では、なかなか本物にはならない。現場で、実際に見、聴き、触れてみることが大事だし、先輩やガイド役の説明が、おおきな力となる。一方通行の説明でなく、質問など、気軽にやり取り出来れば、ベストと云えるだろう。

そんな観察会には、実際にはなかなか出会えない。ところが、ボランティア・レンジャー協議会の観察会で、それに出会えた。

野幌森林公園では、われわれ４人のグループに、内山さんがガイドしてくださった。芸術の森では、グループ分けはしなかったが、草花・樹木・岩石など、それぞれ専門の方が説明してくださった。

どちらも、参加者としては大変贅沢な話で、これ以上は望むべくもない。ただ、両方向の話のやり取りが出来るという点で、どちらかといえば、野幌方式に軍配を挙げたい。

どちらも、楽しいひと時を持てたのは間違いなく、お世話になった皆さんには、「感謝」の一言です。今後も、頑張って頂きたいですし、また、楽しませて欲しいと思います。

・　７月９日；野幌森林公園
・　７月２３日；芸術の森

・　札幌市手稲区前田５条１２丁目８－６
・　原田　和彦

自然ガイドを考える

苫小牧市　　谷口勇五郎

私は定年後、生きがいのためやボケ防止のため、暇つぶしのために自然ガイドになりました。ボラレンの講習をその２～３年後に受けました。その前にも色々な団体の講習会や資格試験も受けました。７年目の現在、私の所属していて、自然観察会（以下観察会）を行っている団体は、ボラレンを含めて７つあります。ボラレンは野幌や札幌などで観察会を行っていて、遠く、自然解説員として参加したことはありません。しかし、他の幾つかの団体で自然ガイド（団体により呼称が色々なので、以下これに統一）として活動し、ボラレンの方とも一緒のことがあります。始めの１～３年は無我夢中で、暇にまかせ（定年後無職）、地元を始め、札幌・野幌など各地の観察会に一般参加したり、山野に出かけ植物を採集し、ノートを作ったりしています。さて、この種のことは余り公の場では話題になりませんし、個人により考え方は様々であると思います。これからの方々のために、多少の参考になればと、恥を忍んで書きます。ベテランの方には、おかしな点があればご指摘下さい。　始めた頃のある講習会で、知人の講師から、休み時間に「あなたの専門は何にしますか。私と同じなら大いに援助します」という話でした。木・草・鳥のどれかというのです。私は何とも言えませんでした。その時、何かに決めていたら、現在とは異なる道を歩いていると思います。

さて、３年目ぐらいのある観察会で、仕切り係（割振り）に当り、参加者50名、自然ガイド10名ぐらいでした。Ａとは下見で一緒のことがあるので、リーダーは無理と思い、Ｂは年配で力量もあるように見えたので「いいか」と目で合図すると、うなずいたと思ったので、ＢとＡを同じ班に組みました。始まると、その班から２～３人が別の班に動いたり、Ａが植物図鑑を３冊ぐらい手に持って、先頭に立ち、Ｂはその集団から５歩ぐらい遅れて歩いていました。あとで聞くと、Ｂは鳥はよく分かるが、植物はサッパリ分からないというのです。そこは鳥の余り出ないコースでした。その後、観察会でＢを見たことはありません。私の完全な間違いでした。自然ガイドの力量をよく知っている人か、その人の意見をよく聞いて仕切るべきでした。　別の観察会で参加者14～15人、自然ガイド７～８人のような状態が数年続いた時、仕切り係をしていて、自然ガイドが多すぎ、自分の出番が少ないので、なんとか自然ガイドを制限できないかと思いました。市外のものは除くとか、申込の早い順に５人までにするとか。しかし、これは班を多くすればよく、参加者３～４名で班を作れば、４班もでき、身近で丁寧なガイドを受けれるわけです。参加者３人もいれば参加者同士のそれなりの交流もできます。ただし、自然ガイドでリーダーの力量のある者が４人いての話ですが。

ある観察会で参加者40人、自然ガイド10名ぐらいの時、しばらくぶりに、力量のあるＣが来て、少し遠くの方にいました。２人ずつ組を作る段で、Ｄが「あいつは嫌われ者だから、一緒にやる者はいないだろう。Ｃを除外しないか」と言い出した。仕切り係の私は「同じ会員だからそれはできない」と。その場にいたＥは「自分が一緒にやるよ。嫌いじゃないから」で決着しました。要するにＣは力量がありすぎ、自分達の出番がなくなると思ったのです。当然とはいえ、会員を除外しなかったことに安堵しています。その後、Ｃを見ていると、率直で、力量

が高く、思いやり深く、素晴らしい自然ガイドのように思います。人には好き嫌いがあったり、個性も色々です。それらを克服して協力していくことと思います。自分の出番を優先するあまり、会員の特定の人を、優れているからとか、嫌いだから排除するという考え方は、人間として余りにも心が貧しいように思います。

さて、色々な場所で色々な人々と観察会を経験して、一般の観察会で対象になる分野は木・草・鳥というところでしょう。勿論、虫やキノコも知っていることにこしたことはないのですが、鳥はどうも、とか、その逆とか、不得意分野があることです。しかし、得意分野は、更に伸ばしつつ、不得意分野は克服のために努力し、木・草・鳥の３分野については、ある程度こなせるようにした方がよいと思います。自然ガイドなのにどれかが欠けていると１人でリーダーを務めきれません。すぐ近くの地面で尾をさかんに上下している白黒の小鳥を指して「あの鳥何？」と聞かれ、「さあ－、専門家を呼びますから、ちょっと待って下さい」とか、オオヨモギとエゾトリカブトが並んで生えている場面で「これは同じものですか」と聞かれ、「自分は草本が専門でないので、専門家を呼ぶので待って下さい」では、全く興ざめです。私達は何か専門の学者ではなく、自然ガイドが専門なのです。しかし、１班１人にこだわるものではありません。参加人数の関係で１班を２～３人でガイドすることもあり、協力し合い、得意分野を大いに生かし、仲良くやればよいだけのことです。

ある所で木・草・鳥のそれぞれ得意の３人がそれぞれを分担して１組になり、観察会を始めたそうです。完璧な布陣と思いました。参加者が10名ぐらいまでは、だいたいうまく行くと思います。ところが、15～20名になってくると、３人がそれぞれ専門を分担しますから１班しかありません。列が長くなり、遠くへ声はとどきません。手先の動きが見えません。鳥がいても鳥の担当者を呼んでいるうちに、どこかに飛んでいきます。どんなに内容がよく、一生懸命ガイドしても、遠くにいる人は欲求不満になります。３人がそれぞれ不得意分野の克服に努力さえしていれば、多少のまずさはあっても、20人いても３班にすれば、ちょうどよい人数です。身近にいて、参加者の質問にもタイムリーに対応でき、声はよくとどき、よく見え、参加者のささやきも聞こえます。１人で７～８人はよく掌握でき、安全上も安心です。そして、すべての参加者はきっと満足してくれると思います。不得意分野は誰にもあります。しかし、色々な理由をつけて逃げないで、真っ正面から取組んでいけば、２～３年で自分のコースにある木・草・鳥のいずれも、自分のものになると思います。不断に個人的に学ぶことは当然ですが、下見には必ず出て、恥かしがらずに積極的に学ぶ姿勢が重要と思います。

自然ガイドをしている目的は生きがいのためと言いました。ガイドをして参加者に微笑みをもって喜んでもらえること、更に、自然ガイド仲間にもさわやかな汗を流して、共に喜び合えるとき、生きがいを感じるように思います。ガイド仲間にはライバル的な面もありますし、力量的にリーダーまでに至っていない人もいるのですが、それなりの出番を望んでいるわけです。参加者に満足してもらうには、参加者のニーズに敏感で、自然ガイドの不断の研鑽と適切な自然ガイドの割振りと思います。７年目でたどりついた考え方です。皆さんのご意見をお聞かせ下さい。

定山渓天狗自然観察会

小樽支部　大川良祐（2006,　6、22）

梅雨のような天候の日が続くなか、予定していた定山渓天狗岳（1145m）の自然観察会を実施しました。この山は昨年 5 月に予定しましたが残雪のため中止となり、今年再度 1 ヶ月ずらして計画したものです。朝方まで雨が降り続き、今年も行き先変更かなと思いつつ、曇りのち雨の予報のとき山の天気はどう推移するか関心を持ちました。男 7 名女 13 名で朝 7 時に小樽を出発し、8 時 15 分白井二股から水嵩を増して白く泡立っている白井川を右に見ながら 30 分で登山口に到着。8 時 50 分から滝ノ沢コースを行きました。

私にとっては初めて登る山で、沢沿いの水流を何度も渡るコースは変化があり、滝まで眺められわくわくした気分になりました。しかしまとわり付く虫には閉口しました。最初は靴を水に濡らさぬよう渡っていましたが、だんだん泥だらけなるとじゃぶじゃぶと渡ります。中腹には堆積された雪がまだ残っていて、こういう地形の所には岩や枯れ木まで溜まるのだと納得しました。天気が気になるのか、登りが急で細い道を一列で登るせいかゆっくりと植物観察するいつものペースではありません。5 合目ぐらいまで来て、これだけ急なコースだと下りが大変だなとようやく気がつきました。天気はどうやらもちそうな気配です。

この山は何々の植物が多いのが特徴だと思いつつ登るのも山の楽しさです。エゾキケマン、タチカメバソウ、エゾノイワハタザオ、コマガタケスグリ、グンナイフウロ、サクラソウモドキ、イワベンケイ、オオバタケシマラン、ミヤマハンショウズル、ミヤマオダマキ、ミヤマキヌタソウが印象に残りました。

頂上近くのロープに取り付き、ようやく 12 時 10 分頂上に到着、霧がかかり視界は不良で寒いくらいです。しかし雨に当たらないだけでも幸運でした。キクバクワガタが頂上に咲いていました。昼食をとり 12 時 40 分下山開始、20 人が順番にロープを伝って降りる箇所では 35 分もかかりました。午後 4 時無事下山、8 時間の奮闘で全員泥だらけ、定山渓の温泉に浸かってから帰りました。

リーダーの天候に対する判断と実行する決断力が強く印象に残る観察会でした。内心では不安でいっぱいだったかもしれません。入山者名簿には 2 日前に下見に行かれた北原さんの名前以降、誰も記載していない山でした。翌日も小樽は終日小雨が降っていました。このとき山の天気はどうなんだろうと思った次第です。

富良野自然観察会

小樽支部　大川良祐（2006,　7、12）

富良野岳（1912m）自然観察会は、低気圧の接近するなか朝４時に雨の中小樽を出発し、７時ごろ着いた現地富良野でも雨が止まず登山を断念いたしました。ガイドをお願いしていた南部栄一さんの配慮により、急遽東京大学の許可を得て北海道演習林を見せて頂くことになりました。山部樹木園では宮田和恵さんのご案内で苗木や、エゾシカの食害の様子など傘をさして１時間ほど観察し、その後富良野市生涯学習センターで博物館の学芸員から富良野の自然などの説明を受け、さらに「どろ亀先生」の愛称でしたしまれた東大演習林長故高橋延清先生の展示コーナーなどを見学させてもらいました。博物館の展示物や展示解説シートは充実した内容で感心致しました。外に出ると雨は上がっていました。次に麓郷森林資料館で巨大な樹木の標本を見学し、ここで南部さんから今朝採りたての温かいトウキビの差し入れがあり、美味しくいただきました。このあと紀宮さまもお泊りになったという山小屋で昼食をとり、富良野岳と大麓山の間に位置する原始ヶ原へ出発しました。途中マタタビやミヤマタタビの花がたくさん咲いており、雄花、両性花のあることを確認出来ました。広原の滝では霧の中を滝が踊っているようです。この上流を渡渉する予定でしたが、水かさが多く危険と判断し引き返しました。午後２時４５分には下山し、温泉の湯に浸かり富良野を離れました。

登山を中止したことで参加された皆さんは不満足だったかも知れませんが、天候に逆らうことはできません。予定を中止する理由、その説明の仕方、中止後の対応策等について事前に腹積もりしていくことの必要性を実感しました。地元ボラレンの南部、宮田両氏のもてなしにより有意義な時間を過ごせましたことを改めて感謝する次第です。

富良野岳登山は次回の楽しみとして残しました。

オコバチ～穴滝自然観察会

小樽支部　大川良祐（2006,　7、22）

小樽天狗山の奥に位置する於古発山～遠藤山（735m）～穴滝をたどる 10ｋｍの自然観察会は、前日に雨の予報でありましたが当日は曇りで実施しました。毎年実施しているコースのためか、あるいは時期が春先でなかったせいか、はたまた新聞の周知の期間が短かったためか参加者が 15 名と少なく、しかも男 12 名、女 3 名と構成割合がいつもと反対になりました。天気の予想も難しいが参加者の予測もまた難しいものがあります。しかも事前の予約なしに当日来られ

る方もあり、相手の体力を推し量る必要があります。

この地域は標高4～500mで、カラマツ・アカエゾマツ・ダケカンバ・ミネカエデの林とササの中を行くコースで、塩谷丸山が途中見えるくらいで眺望はさほど良くはありません。道沿いには、ウツボグサ、ハナニガナ、クルマユリや小さなツルアリドオシ、コナスビ、オオヤマフスマなどが咲いていました。一方、春先に華麗に咲いていたサンカヨウ、エンレイソウ、シラネアオイ、ルイヨウショウマは既に実をつけています。サラシナショウマは小さな花穂をつけてこれからだ言っている様子です。遠藤山を下ったところにある穴滝は、滝の水が深くえぐれた岩壁の洞窟の縁を流れている珍しい所です。湿地帯で川を渡りながら行く難コースですが、それだけに達成感もあったようです。

登山道には足元に注意が必要な草刈が進んでいない所や壊れた標識もあり、これらの整備更新を考慮する必要があるようです。また於古発山と遠藤山の間のコルに数日前にはあった新幹線鉄道地質調査用の櫓は既に取り払われていました。

塩谷丸山自然観察会

小樽支部　大川良祐（2006,　9、16）

各地から秋の紅葉が伝えられるなか、塩谷丸山（629m）で自然観察会を実施いたしました。塩谷丸山は眺めの良い山で毎年実施していますが、今年は塩谷駅側から登り、最上町側に下りるコースにしましたので、車で来られた方は予め下山口に集合してから少数の車で登山口に回ることになりました。参加者は28名、曇り空でしのぎやすい気温でした。

紅葉には早すぎたようですが、お馴染みのアキノキリンソウ、エゾゴマナ、サラシナショウマなど秋の花や４種類のタデを確認できました。ヤブハギ、ウマノミツバ、キンミズヒキ、ハエドクソウの種がズボンにベッタリ付いてしまいました。なかでもヤブハギが一番しつこく洗濯しても付いています。
反射板を過ぎると緩斜面でササとススキの原が広がり、虫の声が響きわたり、まさに秋の風情です。（北電に問い合わせたところ、この反射板は変電所の情報を伝える電波の方向を変えるためのものだそうです。）

最後に岩場の急斜面を登ると山頂で、積丹半島の山々、余市岳は見えましたが、羊蹄山やニセコの山々はあいにくの雲で見えませんでした。
昼食の後、松原さんが登って来る途中で見つけたキノコを２０種類並べて講義を行いました。そのせいか下山時には野草よりもキノコの方に皆さんの目が向いたようです。天気にも恵まれ参加者に満足して頂いた観察会であったと思います。

小樽市塩谷丸山の植物相

小樽市博物館紀要１８号より要所を抜き出しコピーしたものです。

小樽支部　北原　武

調査方法

本調査は2001年9月より2003年8月まで17回に渡って実施された（表1，図1）．調査は塩谷側登山道入り口を起点に山頂までの登山道（約3キロ）を踏査し，発見した植物を記録し，標本を作製した．また，調査区間を周辺環境の変化から３つの地域に区分し（図2-3），調査区ごとの出現状況を記録した．標本は全て小樽市博物館に収蔵されている（登録番号10532）．

調査区の環境

調査区１　山麓地帯（図４）

約1000メートルの行程で，標高差は約100メートル．山麓部の北向きの緩斜面で，登山道入り口から約350メートルまでが農道で，その後幅２メートル程の登山道になる．カラマツ植林地，落葉広葉樹林，農地跡や周辺の疎開地がモザイク状に分布し，所々に小沢も見られる．大部分は民有林で近年手入れは行われていない模様である．上層木はまばらで，日当たり，通風が良く，林縁はキク科，タデ科などの大型草本が多く，所々にツル植物がからんでいる．

調査区２　山腹地帯（図５）

約1200メートルの行程で，標高差は約250メートル．カラマツの植林地が大部分を占め，中間地点に民有林と国有林との境界がある．七曲がり取り付きから傾斜が急になり，次第に岩礫が現れ，歩行を妨げるようになる．このあたりから落葉広葉樹の密度の高い二次林になり，所々に災害によるものと思われる疎開地が認められる．手入れが行われないため，年々林内が暗くなりつつあり，林床の植物相の変化が懸念される．

調査区３　山頂地帯（図６）

約800メートルの行程で，標高差は約180メートル．通称「台地」の取り付きから山頂まで．台地の上は緩斜面ながら海風をまともに受ける風衝地帯で，この山の特異な姿を形作っている．台地はササに覆われ，所々に風衝により変形した樹木が見られる．山頂付近は岩塊の折り重なる急斜面で，西側は切り取られた絶壁となり，かなりの高度感を味わうことができる．

調査結果・考察

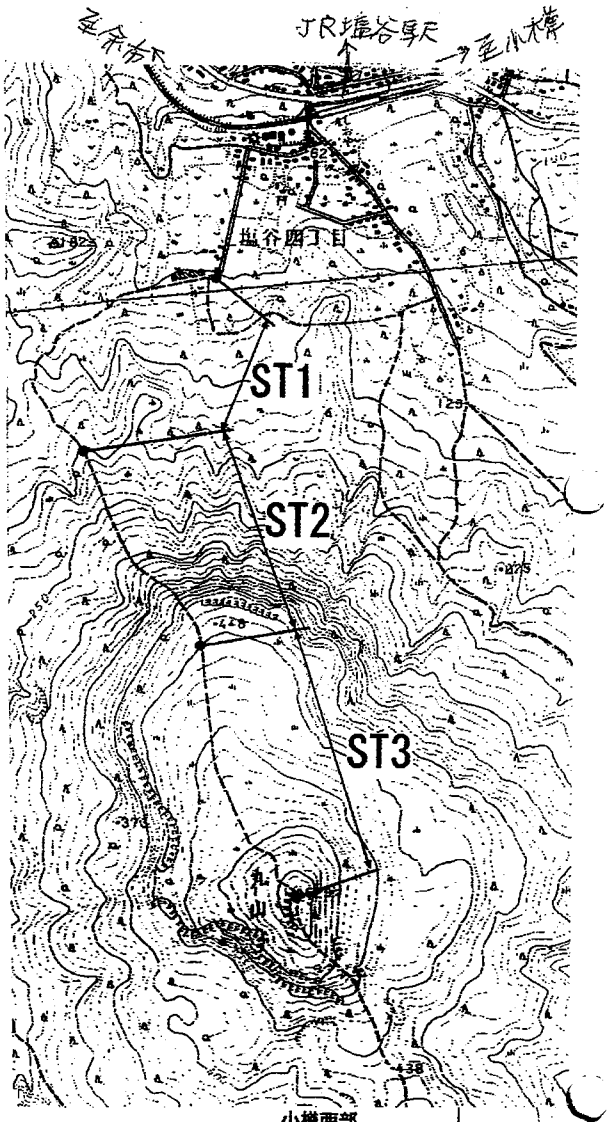
今回の調査で確認できた維管束植物は合計で86科322種で，シダ植物9科21種，裸子植物3科5種，被子植物74科296種という内訳となっている．長橋なえぼ地区で確認された94科364種（渡辺，2002）に種数では及ばないが，山地性の特異な種や希少性の高い種が比較的多く認められた．3つの調査区ごとの種類数は表2のとおりである．

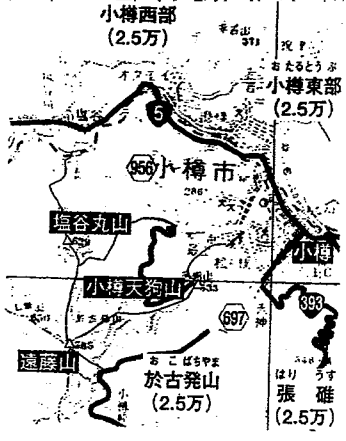
山麓部の調査区1は農地に隣接した疎開地が多く，開けた明るい環境に依存する植物が数多く認められ，種類数では3区分のうち最多の種が確認できた．特にオオイタドリをはじめとする，オオヨモギ，オオハナウドなどの大型草本，それにからまるミツバアケビ，ヤブマメ，ネナシカズラなどのツル植物などが特徴的であり，盛夏以降は鬱蒼とした雰囲気になる．また，農廃地に取り残されたり，農耕地から逸出したと考えられる帰化植物の頻度が高い．

山腹部の調査区２はカラマツ主体の人工林が多いが，高度を増すにつれてシナノキ，カンバ類，イタヤカエデなど落葉広葉樹の占める面積が大きくなってくる．林は林冠が混み合い，暗さを感ずる程である．この地域は拡大造林が盛んな時期，一斉に人工林化され，以降長い年月をかけて，生き残ったカラマツ林と，カラマツ不成績地に侵入した二次林が入り交じる過密な林になっている．林床部はツタウルシ，ツルアジサイ等が多く，植物の種数は少ないが，疎開地にはシラヤマギク，オトコエシ，ユリ科などの草本が豊富に見られる．また，ニガキやクリなども見られる．

調査区3はササを主体とした広い原野と山頂部の岩礫地からなる地域で，チシマザサの群生の中にシナノキ，ナナカマド，ヤナギ類，カラマツなどが単発的に出現し，風衝地独特の景観が認められる．登山道に沿った幅1メートル程の日当たりの良い部分にはエゾノイワハタザオ，ハクサンチドリ，ウツボグサ，エゾシオガマ，ツリガネニンジンなどが季節ごとに順を追って見事に咲きそろう．岩塊からなる山頂部は矮化したツノハシバミ，ハナヒリノキ，バッコヤナギが多く，さらにエゾノキリンソウ，エゾマンテマなど岩礫地特有の植物が見られた．

近年本山は，登山・山菜取り目的の入山者が増加し，登山道周辺の土砂の流出や道幅の広がりが年々目立つようになっている．また，手入れの不足による林内の密生化，単純化が進行しており，中・小型の草本類の生息に影響を与えていることも懸念される．これらの問題に加え，希少種の盗掘，山麓に計画されている新幹線・バイパスの建設，ゴミ処理場の拡大による影響など，本地域の自然環境をとりまく状況は厳しいものであると言わざるを得ない．この研究が，塩谷丸山の豊かな植物相を保全するための基礎データとなることを期待すると共に，早急な盗掘対策，登山道端に生活域を拡げてゆくササ，ツル類の除去や植林地の除間伐などの積極的な取り組みが急務であることを強調しておきたい．





Gray Whale Migration
コククジラの回遊に参加して

滝上町立滝上中学校
教諭　冨山光太郎

A　プロジェクト

I.　CERFについて

「コククジラの回遊」というプロジェクトへの参加であったが、クジラだけにこだわらずカナダ西海岸の多くの生物について学ぶ事ができた。ＣＥＲＦ（Coastal Ecosystems Research Foundation）は北アメリカの太平洋岸に沿って生態学的な研究活動しているカナダの非営利組織（NPO）で、特にカナダのブリティッシュコロンビア州とメキシコのバハカリフォルニアでのコククジラとザトウクジラの研究を中心に行っている。研究の拠点はバンクーバー島北部、ポートハーディの北東、クィーンシャーロット海峡に浮かぶBramham IslandのSkull cove に面した Xusela で、簡単な屋根組をしたキッチンを中心にスタッフ手作りのキャビンやテントで生活し研究を行っている。また、漁船を改造した「Stardust」もキッチンやベッドを備え、宿泊をかねての海上での調査も可能である。また、Xusela 沿岸での調査には、小回りのきくシーカヤックを活用している。

II.　調査日程

05.8.16

Port Hardy Quarterdeck Marina にて集合。WaterTaxieにてXuselaへむかう。Xusela 到着後キャビンの割当とチーム分け（私はTeam4）を含んだ簡単な説明。

05.8.17

午前　シーカヤックのレクチャー。および近隣の小川およびビーバーダムでのカエルの識別調査。

午後　シーカヤックでの調査。Xusela近郊のKelpBedの水温、塩

分濃度、水中カメラでのビデオ撮影。夕食後　歓迎の挨拶、安全についての説明。CERFの研究の概要説明。

05.8.18

午前　シーカヤックでの調査。Xusela近郊のKelpBedの水温、塩分濃度、水中カメラでのビデオ撮影。午後　近隣の小川（別の場所）でのカエルの識別調査。

05.8.19

Stardustによる海上調査（Xusela～PortHardy）出発。夜はQuarterdeck marinaに停泊。

05.8.20

引き続き海上での調査（PortHardy～Xusela）

05.8.21

Port Hardyへ。移動中も海上にて調査。Quarterdeck marinaにて解散。

III.　生活

1. メンバー

ボランティアはＵＳＡ８名、カナダ１名、ロシア１名、トーゴ１名、アルーバ１名、そして日本からは佐藤幸代先生と私の２名、合計１４名で、３～４名のチームを組み活動を行った。スタッフはカナダ、ＵＫ、ＵＳＡ、メキシコ、スペイン、ドイツからの10名が対応してくれた。ボランティアのなかまは皆１つの目的のもとに集まってきたメンバーだけあって、言葉の壁はあってもすぐに意気投合して活動を行う事ができた。後で送られてきたメールにも「私たちはよいチームだった」と書いてくれた人も数名。本当にすばらしい仲間だったと思う。スタッフのメンバーも私たちをいつも気遣い、多くの事を詳しく教えてくれた。彼らが毎朝入れてくれる「１杯のコーヒー」はとても暖かく、彼らのぬくもりが感じられた。また、キャビンやトイレ、キッチンなどもすべて彼らの手作り。研究者としてだけでなく、生活においてもとても頼りになる若者たちであった。

2. Xuselaでの生活

周りを海に囲まれ、まさに大自然に抱かれての生活。それがXusela

だった。電気は発電機のみ。生活に使われる事はなく、研究のためのコンピュータ、デジカメのバッテリーの充電、そして生活施設をつくるための電動工具を動かすためだけに使われた。夜の明かりは個人の懐中電灯以外はたき火のみ。たき火を囲んでの食事はとても心地よく、片言ながらも話が弾んだ。また、夜の闇は、海辺の夜光虫を青く光らせ、雲と森の合間に見える星空は美しくすばらしいものだった。スタッフが建てたキャビンはそれぞれ面白い名前が掲げてあり、私のキャビンには「Mr.Bonk's Seal Shack」（ミスターボンクのアザラシ小屋？）と書いてあった。このキャビンで６日間シュラフで、アフリカのトーゴ出身のBasileと過ごした。シュラフを持っていなかった南国出身のBasileはとても寒そうであったが、私のシュラフカバーと皆が持ち寄った毛布で気持ち良さそうに寝ていた。

食事は水道がないため、水はすべてPort Hardyから運んでいた。調理はガスコンロがあるためほとんどの事は可能。しかし、冷蔵庫がないため食事は肉や魚のないベジタリアンの食事が用意された。ボランティアやスタッフもベジタリアンの方が多く、私もベジバーガー等初めて口にしたがとてもおいしかった。また、朝食には朝づみの野生のベリーをいれたパンケーキを出してくれたり、質素ながらもスタッフの心のこもったもてなしに毎食が楽しみだった。３日目には佐藤幸代先生が日本から持ってきた食材をもとに日本食を振る舞った。私もお手伝いをし、肉のない肉じゃがと、みそ汁、お好み焼きをつくった。皆さんの反応は上々。肉じゃがの汁まできれいに食べてくれた。でも、みそ汁の味に一番感動していたのは私たち日本人の２人が一番だった。

IV.　調査内容

1. シーカヤック

カナダではカヌーやカヤックがとても一般的なスポーツであり、子どもからお年寄りまで休日など楽しんでいる様子が見られる。私もオープンデッキのいわゆる「カナディアンカヌー」は持っているのだが、「シーカヤック」は初めての経験であった。実は以前よりシーカ

ヤックに挑戦したいと思っていたが、今回まで２０年近くがたってしまった。しかし初挑戦があこがれのカナダの海で経験できた事は本当に幸運だった。シーカヤックのレクチャーは主任研究者のWilliamから直接受ける事ができた。私はいつもシングルパドルを使用していたため、今回のダブルパドルはとても効率がよく、スイスイと漕ぐ事が出来た。また、腕に頼らず「腰から太股の筋肉を使う」というWilliamのアドバイスのおかげで、とても楽しく効率的にシーカヤックを楽しみ、調査を行う事が出来た。

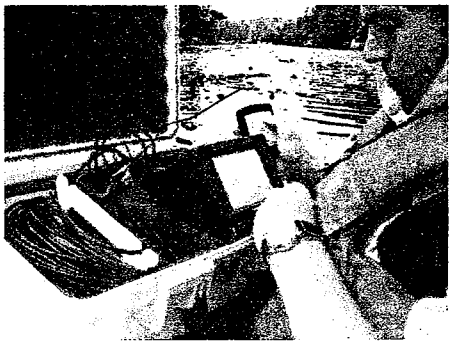
2. カエルの捕獲調査

skull coveに流れ込む小川、および古いビーバーダムへシーカヤックを使って接岸し、カエルの捕獲調査を行った。カエルの種類はRana属、つまりアカガエル科で日本のアカガエル、例えば北海道のエゾアカガエルにとてもよく似ている。水辺に生息するこのカエルを子どもの水遊び用のピンクと青の網でとらえた。捕獲後は下腹部の写真を撮り、捕獲地点の緯度と経度を、GPSで調べ記録を行った。カエルの下腹部の模様は１匹１匹が人の指紋のように異なっており、データを集める事によってそれぞれの個体の移動の様子を調べる事が出来る。また、この写真を使った識別作業（Photo-identification）はコククジラの個体識別にも使われており、学生たちのトレーニングも兼ねている。私は生物を捕まえたりするのが子どもの頃から大好きなため、張り切って活動に参加した。結果そこそこの数のカエルを捕獲する事ができ、「frog catcher」の称号をいただいた。このBramham Islandは我々の他に住んでいる人はなく、全くの無垢の自然が残されている。遠い昔にビーバーがつくったダムによって生まれた沼、たくさんの地衣類やコケ類におおわれた温帯雨林の森はとても美

しく、見るものすべてに感動を覚えた。また、一歩一歩森をすすむスタッフは自然に対するインパクトを出来るだけ少なくするよう心がけており、多くの人々が訪れ、削られた登山道がつづく、日本の国立公園を目にしてきた自分には人々の自然に対する意識によって自然を守る事が可能である事を改めて認識させられた。

3. シーカヤックを使っての洋上での調査

ボランティア全員がシーカヤックの操作が出来るようになったところで、シーカヤックを使った洋上での調査を行った。行った調査は、①海表面の水温　②塩分濃度　③水中のビデオ撮影の３種類でこの調査を行ったすべての地点の緯度と経度をＧＰＳをつかって記録した。海水温は１２℃～１４℃で、カナダはほとんどの単位が日本と同じなため助かった。（アメリカからの参加者は温度の他、長さや重さなどの単位がちがうためスタッフは説明に気を使う様子が見られた）水中カメラは小型で１０～２０メートルの海底の様子を鮮明に映し出していた。調査地点はいわゆるKelp Bed。つまり、コンブのなかまが生い茂るKelp（コンブ）の根元付近にコククジラの主要な餌となるMysid（アミ～小型の遊泳性のエビ）が生息しているためである。カメラはKelpの仮根付近に群れるMysidや岩礁の様子、そしてRockFishと呼ばれる魚類（おそらくソイのなかま）をも鮮明に映し出していた。しかし、Mysidの量は少ないらしく、この原因がエルニーニョによる、海流の変化である事をスタッフおよびWilliamが解説をしてくれた。このB.C州の沿岸が豊かなのは湧昇流によるもので、深海の豊富な栄養分を含んだ海水が沿岸部にわき上がる事で



多くのプランクトンが発生し、生態系の源となっている。この現象がエルニーニョによって妨げられ、多くの生物に影響が出ているようである。事実、調査前後に見たのニュース番組では毎日Sockeye Salmon（ベニザケ）の回遊の遅れが報道され、コククジラもほとんどSkull cove付近には回遊してきていない状態であった。

このほか私たちと別の日にシーカヤックでの調査を行ったグループは、なんとHumpback Whale（ザトウクジラ）に出会う事ができ、「カヤックがゆれたよ！」と同じキャビンで寝泊まりしたアフリカのトーゴより参加したBasileは興奮して話をしてくれた。

4. Whaleboat「Stardust」での洋上調査

調査４日目に１泊２日の調査船でのクジラの調査に出かけた。方法は簡単。非常にゆっくりとした速度で航行し、我々一同、水平線に目を凝らす。しかし、Wiliamの眼光はまさにプロそのもの。われわれボランティアが疲れて談笑している際にも、舵を握りながら目を凝らす姿には感銘を受けた。そして、我々が今、いわゆる「Whale Watching」の船に乗っているのではないという事を実感する事が出来た。だが、この１日目は天気もぐずつきイシイルカやネズミイルカの以外のクジラ類は姿を見せず、Williamも残念そうであった。しかし、岩場に休むアザラシやたくさんの海鳥（北海道では大変数が減っているウミガラス類やウトウなど）、大空を飛ぶBoldEagle（アメリカハクトウワシ）など多くの生物を観察する事が出来た。そしてなにより子どもの頃よりこのような「調査」「研究」憧れていた私は何ともいえない満足感に満たされていた。

２日目、Quarterdeck marinaを出航後すぐ、Port Hardy Airport近くの内湾で親子のHumpBack、つまりザトウクジラを発見した。この調査が始まって初めての大型クジラである。私は1992年3月の２週間にマウイ島で見て以来の出会いであった。92年に出会ったクジラたちは「子育て」「繁殖」の時期である。南の海をゆったりと泳ぐザトウクジラたちを見て、「次は採餌している姿を！」と思い、早くも１３年がたってしまった。Williamはこの親子を発見するや否や追跡態勢に入った。この船には「Research」の文字が書いてある。つまり、

登山とペットについて

富良野市　　南　部　栄　一

昨年の「岳人」１１月号では、弁護士の溝手康史氏が「山の法律学」に、八ケ岳山荘の方が「かわら板」に、「登山とペット」に関する意見をそれぞれ書かれていましたが、登山好きな獣医師としての自分なりの所見を述べたいと思います。

原理原則としては弁護士の溝手氏の通りかも知れませんが、現状では個人的にも獣医師としても持ち込みを規制すべきだしその方向で法整備すべきであると思っています。また、欧米との比較もされていますが、公園、河川敷、道路などでの現状～糞尿の後始末、ペット嫌いな人への配慮、リード綱の問題等、ペットと共存するための最低限のマナーやルールについてのことがよく新聞の投稿苦情欄で見られます。山岳へのペットの持ち込みを認めた場合、同様の問題が起きる可能性は大きいと思います。

それは、自分のよく登る北海道の大雪山系、十勝連峰でもペットの持ち込みは登山口の掲示看板で禁止されていますが、それでも持ち込む登山者は時々見受けられます。それもリード綱も着けずにフリー状態で、日頃のストレスをいっきに発散させているかのように走り回っているペットの姿をよく見ます。

しかし、考えなければならないことは、登山者は必ずしも犬好きな人ばかりでなく、緊急避難のとき以外はみ出ることが許されない登山道での交差、追い越しなどの対処対応、また、どんな山でも１ヵ所や２ヵ所はある危険なやせ尾根や急斜面での対処対応、そして、こうした場所で犬が近づくことは、ほえたてられことに驚いての転倒事故や滑落事故、噛み付き事故などがあった場合の責任問題、とくに欧米では考えられない集団登山とのすれ違い交差、追い抜きや上方から見下されるのを嫌う犬の習性から急斜面での交差時に威嚇したりほえたりのケースが多いようです。

糞便の問題もあります。北海道では一部の登山口にトイレが設置されているにすぎず、山小屋、キャンプ等にもトイレがない所が多く、周辺のアチコチに糞尿とテッシュペーパーの花が咲き乱れている状態です。だから携帯トイレの普及啓蒙が図られていますが普及率は低いようです。こうした中で、ペット、とくに犬の適切な糞尿処理等まったく無理と思います。そこでもう一つの問題が生じてきます。犬には異嗜といって、癖や病気のため石や砂利、草、糞便などを食べてしまうことがあるのですが、北海道の場合、生息するキタキツネにエキノコックス寄生感染率が高いことです。

犬がキタキツネの糞便を食することで、今度は犬を介して人間が感染します。そ

して何年か経ち、忘れた頃に肝臓疾患を起こします。そしてもし北海道以外から持ち込んだ犬だとしたら、地元に帰省後その地を汚染地区にしてしまう～こうした図式を考えるとゾッとします。

病気のことについてですが、皮膚病、ジステンバー等がタヌキ、キツネ、イタチ科の野生動物が互いに感染し合います。そして、いまだ不明の野生動物の病気が犬に感染したり、犬を介して人間に感染発病したりすることも考えられます。また、アルプス等では人間をあまり恐れない雷鳥の生息地に犬が入り込んだ場合どうなるか？　こうした希少貴重な野生動物については何かあった場合、謝って済む問題ではないし、弁償弁済の方法もないと思います。

それから溝手氏は「尾瀬のように自然の生態系を保護する必要性の高い山域では、ペットの持ち込みが自然生態系の破壊や環境汚染をもたらす可能性のあることは否定できない」と述べていますが、日本の国立公園、国定公園、都道府県立公園の場合、そのほとんどがそれに該当すると思います。

さらに乱開発や多くの人間の入り込みが、より自然破壊をしているから、欧米ではペット連れが常識で何か言うほうが間違っているかのように述べる人がいる限り、法や条例での規制が必要と思います。そのように規制することが、現況では、登山者、ペット「犬」、生態系「野生動物等」それぞれにとって最適と思います。関連するご批判、ご意見を期待しています。

上記の「登山とペットについて」は、南部氏が山岳雑誌「岳人」に投稿し、今年の３月号に掲載されたものです。

忘れ得ぬ花たち終

当麻町　野　呂　一　夫

野生種との再会＝アツモリソウ＝

かつては旭川近郊でも簡単に見られた花だが、心ない人や業者に持ち去られたり自生地が切り開かれたりして、全く姿を消した。今では奥地のクマの出るような所にしかない。

1991年6 月4 日、士別市の林内。

「ありましたね」

「ありましたよ」

やっと見つけたその時、喜びをかみ殺すかのような小さな会話。

誰のためでもない、自らの種の保存のための大きな紫の袋を、細い茎でいかにも重そうに支えている。野生ならではの色、艶、形。その美しさゆえに仲間のほとんどが消え去った今、薄暗い林の草陰にひっそりと生き残っていた。それは、実に30数年ぶりの野生種との再会である。同行の調査員と、「やはり野におけ・・・・・」の意味合いを言外に確認しあったひとときであった。

大雪“幻の花”＝ムシトリスミレ＝

葉の表面に多数の腺毛があり、粘液を分泌して小さな虫を捕らえる。スミレと名はついていても花が似ているだけで、スミレ科ではなくタヌキモ科の植物だ。

文献によると、北海道中央高地では、平山と富良野岳に分布していることになっている。しかし、平山の生育地といわれた場所は、その周辺も含めて荒らされ方がひどく見る影もない。

残るは富良野岳 —— 。生育適地とおぼしき水湿潤沢な岩地や草地を、懸命に探し歩くこと数年。しかし、一向に姿を見せない。本当にこうした所が生育地なのかと、改めて夕張岳まで見に行ったり早池峰山でも確認したりしてきた。

長年富良野岳の監視人をしていたW氏から、「ここで見た」という情報を頂いて、再三にわたって探し回った。確かにあってよさそうな環境ではあるが、やはり今はない。そうこうしているうちに、どんどんと月日が流れていく。

「何のために」と問われても、自分でもよく分からない。ただ、これが徒労に終わると知りつつも、体の続く限り追い求めることだけは間違いのない、「大雪“幻の花”」である。

ムシトリスミレ　撮影ータ張岳

秋・カムイのすむ森～野幌

札幌市東区　　小泉　三雄

‘０３年９月１９日（木）　晴れ

「図鑑にない説明をしたい」「参加者の皆さんと会話しながらすすめます。質問あれば遠慮なく～。」願いは【自ら考え疑問や驚き、感動を共有】すること ……

いきなり、「どんなことでもいいですか？」「ササとタケの違いを教えてほしい」との質問。１本拝借したササを見て考えてもらった。「大小の違い！」という言葉があつたが、両者が明確に区別できるポイントではなかった。成長したあと、稈鞘が離脱するか否かによって分け、早く離脱はタケ類で、いつまでもついているのがササ類とする現在大方がこの考え方に従っていると説明した。

瑞穂の池が見え観察会終点、繁茂したミゾソバ（タデ科）を見て花の変異（がく片の様々な色調）に気づいた方がいた、花色は三つのタイプあり花びらに見えるは「がく」であると言ったらふしぎそうな顔をして触りはじめた。花被は口を閉じそう果包んでいる。ソバと同じように三角形でデンプンを貯えており、普通、タデの種子は鳥たちによく食べられる。日本では奈良時代（養老６年７２２年）に凶作に備えて栽培を奨励された記録が最古のものでるとか。人びとが食べたかどうか？

（すこしづつ心きだまる秋の日の
ミゾソバの花半ばつぼみ）

‘０３年１０月２０日（日）　晴れ

ひんやりした朝に澄み切った空を見、絶好の観察日に心がはずみ早めに出かけた。

今日はいろいろな「におい」を嗅んで長生きしてもらいますと、カツラの樹の下で立ち止まった。個々に葉を拾い「いい、におい」の声。独特な甘い香は葉の中における含有量が多いマルトールという物質が主体で、マルトールはカカオ豆、パン、麦茶、牛乳乳製品、肉類などにも含まれており、焦げた砂糖の香気を持っています。カツラがなぜマルトールを葉に多く貯えるかは、不明ですが、マルトールが他の生物、例えば昆虫や植物、微生物に対して忌避作用等があることもわかっており、植物の自己防衛手段の一つと考えることもできるのではないでしょうか。

ノッポロガンクビソウ、ヨモギ、キタコブシ、ハッカ、トドマツと６種の「におい」を嗅いだ。１種で３年だから１８年長生きと「じょうく」、最後にツルニンジンの悪臭で５年短命と大笑い。

※野幌での観察記録の中から冬・春・夏・秋四回シリーズで執筆しました。大自然と長い付き合いがあり足跡を記録に残してあります、次は川のことで執筆しますか。

（葉に触れてカツラのにおい　香は知り
香気求めて道歩みゆく）

書評　　自然への親しみをこめた案内書

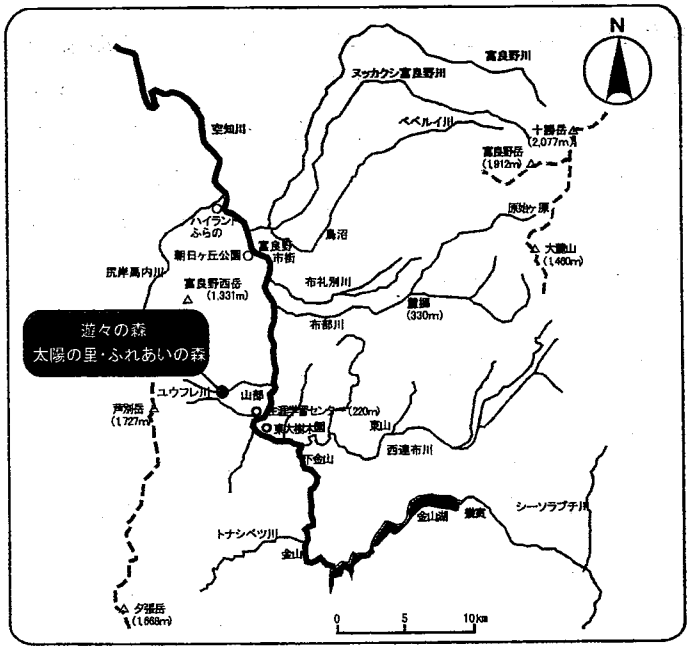
— 富良野山部にある遊々の森「太陽の里・ふれあいの森」自然観察ハンドブック —

広報部

東大演習林の研修の際、会員で執筆者の一人で富良野在住の宮田和恵さんから、遊々の森「太陽の里・ふれあいの森」自然観察ハンドブックをいただいた。一読して、自然全体に関してとてもわかりやすくていねいに書かれているのに感心した。

遊々の森「太陽の里・ふれあいの森」とは、富良野市が芦別岳の麓に広がる国有林を所管する森林管理署と協定を結んで、子供たちの自然学習の場として使用しているところである。国有林である遊々の森、それに親しみをこめて独自に「太陽の里・ふれあいの森」と名づけているために、やや長い名前となっている。周囲 51 km の広さのなかに二つの散策コースがあって絶好のフィールドとなっている。

このガイドブックは、他の書物には書かれていない領域にまで踏み込んで、自然の仕組みをトータルに記述している。川の石ころから岩石の分類へ、更には地球の誕生、森の成り立ちとしての倒木更新、旅をする種子の説明、動物の足跡、食べあと（食痕）、水辺の生き物、そして冬の森で見られる冬芽などとても多面的である。そのこととも関連するが執筆者たちはこの森林を長年にわたって観察し調査し貴重な写真などをたくさん載せている。



太陽の里・ふれあいの森の位置

またこの本には、どろ亀（高橋延清）さんの＜森にはウソがない＞という内容の詩「森の世界」を載せている。これは森林に学ぶ子どもたちや大人をも含め大きな励ましのメッセージになっていると思う。

「森には何一つ無駄がない　植物も　動物も　微生物もみんな　つらなっている　一生懸命生きている　－　－　－
森には美もあり　愛もある　激しい闘いもある　だが　ウソがない」

この森の案内書を作成した人たちも、どろ亀さんの詩にあるように＜森にはウソがない＞という精神で書かれたように思われる。

散策コースのすてきなイラストを描いた宮田さんに作成にまつわるエピソードや利用のされ方などを聞いてみた。

彼女は、子どもたちに木の葉の形などが、わかってもらえるように描くために一人で何度も森に行かなければならなくなり不安なこともあった、と語っていた。

また富良野の子どもたちは総合学習の時間にこの本を活用していること、山部の第一小学校（生徒数１２名）の生徒たちはこの本をもとに「山菜マップ」を作ったりしているそうである。

私たちは、野幌森林公園を第一のフィールドとしているが、市民向けの案内書は数多くあるが、小中学生向けに自然の全体の仕組みを解説したガイドブックはないように思う。私たちもこの本に学んでそうしたことに取り組んでみたいものである。

なお、発行は　富良野市生涯学習センターボランティアの会・富良野市博物館。

＊　**忘年会の案内**

- **12月1日(金) 18時30分**　会費３５００程度
- **場所　七福神　中央区北5条西7丁目**　鉄道の高架下
- 申し込みは　総務部長の三崎さん　電話 011-772-0563
  １１月２２日（水）まで
- 今年はハガキで案内を出しませんので参加者は忘れずお願いします

平成18年度

北海道ボランティア・レンジャー協議会第二回役員会

日時：平成18年9月 28日（木）　18：30～
会場：かでる2・7　ボランティアルーム

役員会次第

Ⅰ.開会
Ⅱ.会長挨拶
Ⅲ.連絡・報告事項
1.総務部　20周年事業対応
(1) 住所タックシール
(2) 仮払金の支出
(3) 会計区分　特別会計
(4) 事業名　20周年記念事業
(5) 概算金総額　350、000円
(6) 資金取扱者　三崎　篤
(7) 概算金使用区分

写真展	30.000	展示費用、その他雑費
会員研修会	90.000	講師謝礼、会場費、機材借用料、その他雑費
記念講演会	104.000	講師謝礼、会場費、機材借用料、PR（一般向け）費、その他雑費
エゾマツ記念号	50.000	編集費、郵送費
その他予算	40.000	
	350.000	

フィールドガイドに関わる費用については、別途扱いにする

2.研修部　富良野東大演習林研修　6/30～7/1　21名参加
鵡川海浜植物観察会　8/26・27　ボラレン　13名　ネイチャーin鵡川1名
オホーツク支部研修会　9/16・17　小林・春日出席　参加者11名
会場：北見市自然休養村センター　北見市若松651
「コククジラの回遊について」　滝上町　冨山光太郎
「小清水原生花園のボランティア活動について

3.広報部
(1)「エゾマツ」77号発行
(2)「エゾマツ」特集号　12月10日発行

＜今後の大いなる発展を目指して……20周年をふりかえり＞

①元会長などの顧問、各年度のボランティア・レンジャー育成会受講者の代表の方に執筆をお願い
②道自然環境課、野幌の森林事務所などにも原稿をお願い
③20周年記念行事

・写真展・五十嵐恒夫さんの公園・大橋弘一さんの講演、それぞれの様子をレポートする

④小樽・オホーツクなど

⑤カラー写真などを入れたい。なるべく企画を統一する。

4.記念会員写真展

出展者：簾内道夫・松原健一・豊澤勝弘・川端功治・佐藤俊行・門村徳男
田中利夫・内山恭子・南部栄一・小嶋章夫・春日順雄・小山賢一郎

出展数：24

5.記念会員研修会　申し込み51名　実際の参加者41名

講師：五十嵐恒夫（北海道大学名誉教授）

講演：「森林とキノコ」

6.事務局

(1) 観察会

「春の花を見つけよう観察会」　4/27　交流館・共催

「春の有り難う観察会」　5/14　交流館・共催

「恵庭公園観察会」　5/21　恵庭公園駐車場・主催

一般参加　6名　ボラレン　7名

「三角山登山観察会」　5/28　緑化会館登山口・主催

「森の新緑観察会」　6/11　交流館・共催

「北広島レクの森観察会」　6/18　レクの森入口・サークル活動

一般参加　14名　ボラレン　7名

「初夏の森観察会」　7/9　交流館・主催

一般参加　20名　ボラレン　10名

「芸術の森周辺観察会」　7/23　停留所前・サークル活動

一般参加　10名　ボラレン　7名

○「森の探検隊」　8/3　開拓記念館・共催

一般参加45名　ボラレン　5名　ボラレンの人数少ないの声あり

○「秋の花で賑わう森を歩こう」　9/14　開拓記念館・共催

一般参加　85名　ボラレン　12名

(2) 常磐中学校PTA広報部から原稿依頼があった（芸術の森周辺観察会に関して）

(3) 北海道環境生活部環境局自然環境課自然ふれあいグループ主査小森節子

①北海道ボランティア・レンジャー育成研修会参加者募集の事

②平成18年度ボランティア・レンジャー育成研修会　7/21～23　田村出席

白井勝博（平取町）・一鐵　巌（小樽市）・梅坪利光（剣淵町）

富永まゆみ（苫小牧市）・室野文男（札幌市厚別区）・阿部　忠（札幌市北区）

三澤由比子（登別市）・阿部敏昭（白老町）・堺　俊樹（札幌市厚別区）

以上9名の入会があった。他に1名

③北海道ボランティア・レンジャー実践セミナー　11/11・12

④20周年記念事業を北海道のホームページに

⑤記念講演会への参加

○(4) 北広島市環境課・石狩支庁環境生活課共催の自然観察会

7/29　北広島レクの森　　佐々木幸夫・小林英世・内山恭子・熊野美子

(5) 江別第二小学校3学年野幌森林公園探検

9/22　我妻・成田・春日・吉田・室野・佐藤・内山・熊野

1グループの人数が18名と多かった。救急箱を持ったグループが最後尾につくこと。子どもの体調不良に備えた体制にするためにフリーに動ける人の確保。携帯電話を知らせあうなど連絡体制を確保する。

(6) 20周年記念事業に関して

◆掲載依頼とその結果

北海道ウオッチングガイド　9月号

環境サポートセンターTGAL　9月号

札幌市環境局の環境マラソン講座の「環境カレンダー」の9月号

北海道アルバイト情報社　「CLUE」

北海道新聞に依頼？

朝日新聞のえるむどおりに掲載依頼　10/5夕刊

まるまる新聞　掲載の確約はできない

道のホームページに

「野の花ニュース」に

「frau」に

◆チラシ配布場所

札幌市の各区区民センター（10箇所）・西岡公園管理事務所・エルプラザ・環境サポートセンター・開拓記念館・自然ふれあい交流館・大麻

◆記念会員研修会と記念講演会への会員の出席調べ

◆記念講演会への一般参加者の受付

◆受付名簿の作成

(7) 記念講演会申込者9/27日現在　ボラレン会員47名　一般参加者34名　計81名

Ⅳ.協議事項

1. 総務部

2. 研修部

(1)　これからの観察会について当番を決めよう

◆10/15（日）10：00～14：30　下見10/14　10：00

「森のにおいをかごう」　交流館・共催

◆11/3（金）10：00～14：30　下見　11/2　10：00

「晩秋の森観察会登満別コース」　主催

◆11/12（日）10：00～12：30　弁当持参　下見11/11

「秋の有り難う観察会」交流館・共催

◆11/23（木）10：00～12：30　下見　11/11　10：00

「西岡水源地自然観察会」管理事務所前　主催

◆12/10（日）10：15～13：00　下見12/9　10：00

「冬の森の観察会」　交流館・共催

◆1/14（日）10：00～12：30　下見 1/13　10：00
「円山登山観察会」円山登山口　主催
◆2/25（日）10：00～14：30　下見 2/24　10：00
「藻岩山登山観察会」慈恵会登山口　主催
◆3/25（日）10：00～13：00　下見 3/24　10：00　弁当持参
「野幌の春を探そう」交流館・共催

3. エゾマツの発行について（10月中旬・1月中旬・3月下旬）

平成18年度

観察会・研修会予定

北海道ボランティアレンジャー協議会

月	観察会・研修会	実施日時	下見	集合場所	備考	当番
4	「春の花を見つけよう」観察会	4.27（木）10：00～12：30	4.20木10：00	交流館（大沢口）	共催	
5	春の有り難う観察会 恵庭公園観察会 三角山登山観察会	5.14（日）10：00～14：30 5.21（日）10：00～12：00 5.28（日）10：00～14：00	5.13　10：00 5.20　10：00 随時	交流館（大沢口） 恵庭公園駐車場 緑花会館登山口	共催・昼食持参 主催 主催	小林・春日 橋場・小林 田村・熊野・内山
6	森の新緑観察会 北広島レクの森観察会 富良野東大演習林研修	6.11（日）10：00～13：00 6.18（日）10：00～12：00 6.30～7.1	6.10土10：00 6.17土10：00	交流館（大沢口） レクの森入り口 富良野麓郷	共催・交流会食事 サークル活動 主催	小林・内山 佐藤・春日・我妻
7	初夏の森観察会 芸術の森周辺観察会	7.9（日）10：00～12：30 7.23（日）10：00～12：00	7.8土　10：00 7.22土10：00	交流館（大沢口） 停留所前	共催・昼食持参 サークル活動	小林・中林 今村・田村
8	森の探検隊 鵡川海浜植物観察会	8.3（木）10：15～12：30 8.26～27	7.27木10：00	開拓記念館 鵡川四季の館	共催・昼食持参 主催	熊野・伊藤
9	秋の花で賑わう森を歩こう 講演会（20周年記念事業） オホーツク支部研修会 写真展（20周年記念事業）	9.14（木）10：15～14：30 9月18日（敬老の日） 9.16（土）～17（日） 9月1日（金）～9月30日（土）	9.7木　10：00	開拓記念館 自然ふれあい交流館	共催・昼食持参	田村・春日
10	森のにおいをかごう 講演会（20周年記念事	10.15〔日〕10：00～14：30 10月9日（体育の日）	10.14土10：00	交流館（大沢口） かでる2・7	共催・昼食持参	佐藤・内山
11	晩秋の森観察会登満別コース 秋の有り難う観察会 西岡水源地自然観察会	11.3（金）10：00～14：30 11.12（日10：00～12：30 11.23（木10：00～12：30	11.2木10：00 11.11土10：00 11.22水10：00	交流館（大沢口） 交流館（大沢口） 管理事務所前	主催・昼食持参 共催・昼食持参 主催	春日・田村 田村・小林 荻野・今村
12	冬の森の観察会	12.10（日10：15～13：00	12.7木10：00	交流館（大沢口）	共催・交流会食事	荻野・佐藤・小林
1	円山登山観察会	1.14（日）10：00～12：30	1.13土10：00	円山登山口	主催	田村・熊野
2	藻岩山登山観察会	2.25（日）10：00～14：30	2.24土10：00	慈恵会登山口	主催	伊藤・三崎
3	野幌の春を探そう	3.25（日）10：00～13：00	3.24土10：00	交流館（大沢口）	共催・交流会食事	春日・高松・小林

※下見時も昼食持参（出現動植物の確認記録や打ち合わせがあります）

◆18年度　活動の重点目標

森の楽しさを体感できる観察会のあり方をかんがえる。

・森の知識を伝える活動
・森から学ぶ活動
・森を介して人の輪を広げる活動

◆当会20周年の節目を意識し、メリハリのある観察会にしよう。
◆会員相互の研修会やサークル活動の活発化を図ろう。

※実践セミナーの関わりで、下見を12月7日（木）に変更しました。

平成18年度ボランティア・レンジャー実践セミナー

受講者募集のお知らせ！

北海道の豊かな自然を次世代に引き継いでゆくために、多くの人々に「自然とふれあう楽しさ、大切さ」を体験してもらう手助けをするボランティア・レンジャー（自然解説員）の中・上級者向け実践セミナーを開催します。

この研修会では、参加者が楽しみながら参加でき、かつ有意義な観察会を開催するには何が必要かを改めて学び、野鳥や動物の足跡など冬の観察会ならではのテーマで、12月10日（日）に野幌森林公園で実施される自然観察会の自然体験プログラムを企画し、実際に実施していただくこととしています。

既に、ボランティア・レンジャー育成研修会（初心者研修）を受講し、「自然解説員」としてご活躍されている方をはじめ、道内各地で「自然観察会」等を企画・実践されている方々は、是非、多数ご参加ください。

○日　時　　平成１８年１２月９日(土) 10:00 ～ 16:00
　　〃　　１０日(日)　9:30 ～ 16:00（２日間）

○場　所　　野幌森林公園自然ふれあい交流館
（江別市西野幌６８５－１　TEL ０１１－３８６－５８３２）
＊新札幌駅からバスで約17分（JRバス１０番文京台循環線「文京台南町」下車後、徒歩９分、夕鉄バス１２番文京通西行「大沢公園入り口」下車後、徒歩７分）
駐車場に限りがあるので、なるべく公共交通機関でおいでください。
http://www6.ocn.ne.jp/~fureai-k/

○対　象　　ボランティア・レンジャーとして自然観察会等において自然解説を既に実践している方、または今後実践する意欲のある方

○定　員　　３０名（申込多数の場合は先着順）

○講　師　　環境共育事務所　うてきあに　代表　太田　稔 氏

○研修内容
12/ 9(1日目)　・自然体験プログラムの作り方と評価方法
12/10(2日目)　・１日目に作成した自然体験プログラムによる「自然観察会」の実施
・実施後のふりかえり（評価と「もっと良くなるヒント」を探る）
・ボランティア・レンジャーの魅力再発見！

○参加費　　１００円程度（２日間の団体傷害保険料）
＊現地までの交通費は各自負担願います。２日間とも、現地集合・現地解散です。

○申込方法　　ハガキ、ＦＡＸ、Ｅメールにて下記の内容を記入し、お送り下さい。
《 記入事項 》氏名（ふりがな）、郵便番号、住所、年齢、性別、電話番号、FAX番号、Ｅメールアドレス、過去に道が主催するボランティア・レンジャー育成研修会を受講したことがあるか否か。

○申込締切　　１１月２４日（金）＊申し込まれた方には、別途詳しい資料をお送りします。

○主　催　　北海道

★★★　申込み・お問合せ先　★★★

〒０６０－８５８８　札幌市中央区北３条西６丁目
北海道環境生活部環境局　自然環境課自然ふれあいグループ　　担当：小森
TEL　011-204-5204　　FAX　011-232-6790
ﾒｰﾙｱﾄﾞﾚｽ　kansei.shizen1@pref.hokkaido.lg.jp

《関連ＨＰ》
http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/skn/hureai/borarenn/borarenntop.htm

編　集　後　記

・ 私たちの２０周年行事、写真展、五十嵐恒夫さんの「森林とキノコ」、大橋弘一さんの「野鳥を通して知る北海道の自然」などの講演には多くの人たちが参加してくれてとても好評でした。私たちの活動を内外に大きく発信することができた。なおその内容については「エゾマツ」の特別号で紹介したい。

・ 夏の登別で開催された「育成研修会」で９人の仲間がわが会に加入された。とてもうれしく思う。共に活動して大きな輪をつくっていきたい。

・ 表紙は、富良野の東大演習林内の大麓山登山の様子を広報部の熊野さんに描いてもらった。今回も多くの原稿をもたった。冨山さんの貴重な体験記の原稿「コククジラの回遊に参加して」は２回に分けて掲載したい。

・ 小樽支部で中心になって活躍している北原さんが、「小樽野草愛好会」を作り塩谷丸山を３年かりで調査した貴重なレポートをいただいた。小樽博物館紀要にも掲載されている。

・

・ 次回の「エゾマツ」の発行は１月末発行の予定で、原稿は１月１５日までに広報部の佐藤清一まで送ってください。Ｂ５で、１ー２枚位。

・ 私の住む北広島のやや高台でも、親子連れの三頭の熊が出没し、とうもろこしなどを食べたようで射殺された。輪厚の方の森から出没し、道に迷って帰れなくなったらしい。動物には、速く走る、空を飛ぶ、眼、耳，鼻などが特別発達しているなど、それぞれ特殊な能力を持っている。熊は大きな体に強いツメなどを持っているが、記憶装置は弱いのかも知れない。人的被害がなくてよかったが、道に迷ったために熊は殺されることになったが、道に迷った人間の場合の行方を考えると複雑でもある。

エゾマツ　７８号
会長　田村　允郁